



第53回日本肝臓学会総会

茶山 一彰

広島大学大学院 医歯薬保健学研究科 消化器・代謝内科学教授

第53回日本肝臓学会総会は、6月8、9日の両日に広島国際会議場およびリーガロイヤルホテル広島において開催された。天候にも恵まれ、3,200名ほどの参加者があり、活発な討論が行われた。6月10日にあわせて開催された教育講演会もおよそ900名が参加し、肝臓疾患に関する市民公開講座も同時開催された。

プログラムは特別講演1題、招請講演3題、International Session 1題のほか、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップ、スペシャルワークショップが主題として行われ、一般演題、ポスターセッションも例年通り開催された。

特別講演では虎の門病院分院の熊田博光分院長が、慢性肝炎の治療に関して同院消化器科の豊富な症例の治療成績をもとに講演された。C型肝炎に関しては、最近新薬の開発がめざましいdirect acting anti-virals(DAAs)に関して最新の治療成績を示された。他の施設では出すことのできない最新の治療薬の治療成績も提示され、会

員は非常に興味をそそられる内容であった。B型肝炎に関しても、予後の調査結果もからめ、B型肝炎持続感染の実態を俯瞰する内容であった。虎の門病院消化器科の総まとめ的なスケールの大きな講演で、聴講した会員は多大な感銘を受けたと感じられた(写真1)。

International Sessionでは、米国国立衛生研究所(NIH)のT.Jake Liang先生、国立台湾大学のJia-Horng Kao先生、シドニー大学のJacob George先生、ストラスブール大学のThomas Baumert先生の4名の海外からのゲストと、日本から国立感染症研究所の脇田隆字先生、国立国際医療研究センターの下遠野邦忠先生の合計6名の演者で、ウイルス性肝炎、Non-alcoholic steatohepatitis (NASH)に関する講演が行われた。さすがに世界の最先端に行く演者の講演はどれも聞き応えがあり、ディスカッションも活発に行われた(写真2)。

シンポジウム1は、「B型肝炎研究の新展開」をテーマに、信州大学の田中榮司教授、大阪大学の竹原徹郎教授



写真1 講演中の熊田博光先生



写真2 会長・茶山(筆者)と T.Jake Liang 先生